

藤井厚二研究 -藤井厚二の経歴と人脈-

宮地功* 松本静夫*

Study on Architect *Fujii Koji*
-His Career and Human Relations-

Isao MIYACHI* Shizuo MATSUMOTO*

ABSTRACT

It is very important to know *Fujii Koji*'s career and his surroundings, in order to know the way and the philosophy of his architectural design. He was born in 1888 and died in 1938. His life can be divided into 4 periods — First period; from birth until entrance to university; Second period ; during Tokyo Imperial University ; Third Period; during Takenaka Komuten ; Last period; during Kyoto Imperial University. He was acquainted with many intellectuals, artists, writers, prominent teachers and so on in his life. He might be affected by those people and he influenced on many people.

キーワード： 藤井厚二、東京帝国大学、竹中工務店、京都帝国大学、西川一草亭、建築学研究
keywords : *Fujii Koji, Tokyo Imperial University, Takenaka Komuten, Kyoto Imperial University, Nishikawa Issotei, Kentikugakukenyu*

1. はじめに

建築家の建築観、設計思想には、生活環境、人間関係など、本人を取り巻く環境が非常に大きく影響していると考えられる。本稿では藤井厚二の建築観、設計思想を考察する先立ち、誕生の1888年から亡くなる1938年の間の、彼の履歴、および各時代に関連を持った、もしくは持ったであろう人々について経年的に論述する。

藤井厚二は1888年に、現在の福山市で生まれ、福山中学、第六高等学校、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、1913年に合名会社竹中工務店に入店した。1919年に竹中工務店を退社し、1920年京都帝国大学工学部講師、翌年同助教授に就任、1926年に学位論文「我国住宅建築ノ改善ニ関スル研究」で工学博士学位を取得し、同年教授に昇任し建築学第四講座（建築設備）を担当した。1938年7月7日、直腸がんのため、教授在職中の49才で死去した。

以下、彼の生涯を、東京帝国大学入学以前、東京帝国大学在学時代、竹中工務店在職時代、京都帝国大学

時代の4つの時代に区分し、経年的に考察する。

2. 誕生から東京帝国大学入学まで

藤井厚二は1888年12月8日に、広島県深安郡福山町字深津町（現在の福山市宝町）で藤井与一右衛門と元の2男1女の次男として生まれた。長男祐吉（1886年生）、次男厚二、末子が長女であった。

厚二の父与一右衛門（廣一）は、藤井廣喬（与策）の長男として生れた。藤井廣喬には、2男4女がおり、第5子が長男廣一、末子が愛吉（明治元年生）であった。廣一は1862年に改名し藤井与一右衛門となった。

父与一右衛門は明治1898年1月19日、厚二が10歳の時に死去し、兄祐吉が13歳で家督を継いでいるが、祐吉が若年であるため、父の弟である愛吉が与策と改名し公職を引き継いでいる。

厚二は1907年に広島県立福山中学（現福山誠之館高等学校）を卒業し、同級生に森戸辰男（1888年～1984年）がいた。森戸は福山市に生まれ、1907年福山中学校卒業後、第一高等学校、東京帝国大学法科大学経済学科卒業し、東京帝国大学法科大学助教授、衆議院議

員、文部大臣、広島大学学長などを歴任した。

厚二は福山中学卒業後、岡山の第六高等学校に入学し、同級生に林譲治がいた。林譲治(1889年～1960年)は高知県宿毛市林有造に生れ、岡山第六高等学校、1918年京都帝国大学独逸法律科を卒業、三菱倉庫株式会社に入社した。1922年に郷里の宿毛に帰り、町長、高知県会議員、衆議院議員を経て、戦後は吉田茂内閣で厚生大臣、国務大臣、副総理、衆議院議長、自民党幹事長などを歴任した。

森戸、林ともに卒業後も藤井厚二と親交があった。藤井家は十数代にわたり造酒屋「くろがねや」を営み、広大な土地を持ち、金融業も行う豪商であった。藤井家は明治20年代を中心に福山で多種の事業を展開し、その後の福山の産業の発展に非常に貢献している。

藤井家は多くの書画、骨董も所有しており、昭和に入り、電気事業の展開資金にあてるため、所有する書画、骨董の売立を行った。売立は、1933年10月、12月の2回にわたり大阪美術倶楽部において行われ、数多くの名品をふくめ総計二千点近い品目があった。第1回の売立金だけで、当時の福山市の財政規模にほぼ匹敵するものであった。第2回の売立にも同様に多くの名品が出されている。

10月28日(土)に行なわれた第1回目入札には、後述する西川一草亭が訪れ、御所丸茶碗が拾萬円であったことを日記に書いている。

父与一右衛門、祖父廣喬共に号を持ち、親戚には、画家、藤井松山(1880.10.20～1967.1.21)がいる。松山は藤井松林から丸山派の画を習い、1896年以降は京都に遊学し、鈴木松年入門し、1934年に福山に帰った。1978年には門人達により「松山画集」が刊行され、刊行発起人の中に藤井与一右衛門の名がある。このように松山は厚二の死後も引き続き藤井家との親交があった。また、厚二と松山は、厚二が京大講師として赴任した1920年から松山が京都を離れる1934年までの14年間お互い京都に在住して、親交があった。

松山が「幼い頃には、重箱に御馳走をつめて、朝暗いうちから能見物に連れて行かれた」と語っているように、厚二も同様に、幼少時から、芸術、芸能、古今の名品に囲まれて文化芸術的環境に育ったことは、想像に難くない。また、厚二自身も、大山崎に移ってからも、書画、骨董の名品を所蔵していた。

3. 東京帝国大学時代

藤井厚二は第六高等学校を卒業後、1910年に東京帝国大学工科大学建築学科に入学、東京小石川に母の元と妹の快(学習院学生)と住み、日本画家の結城素明に絵を学んでいる。

1913年7月に大学を卒業し、同期卒業生は、堀越三郎、佐藤四郎、戸田利兵衛など19名であった。

彼と同時期に在学していたのは、1911年の卒業生である大林賢四郎ら13名、1912年の卒業生の山下寿郎、山田醇、竹腰健造ら16名、1914年卒業の下元連、遠藤新ら13名、1915年卒業の三浦耀ら13名であった。

藤井が在学中の東京帝大の教師陣は以下の陣容であった。第一講座、建築一般構造、中村達太郎教授(M15工部大学校卒)、第二講座、建築計画、塚本靖教授(M26東京帝大卒)、第三講座、建築史、伊東忠太教授(M25東京帝大卒)、関野貞助教授(M28東京帝大卒)、1911年からは内田祥三(M40東京帝大卒)が講師として、富尾木知佳講師(不明)が1911年4まで在職した。佐野利器(M36東京帝大卒)は1903年に講師に就任しているが、1910年～1914年の間欧米へ留学中であり藤井の在学中はいなかった。佐野は藤井の卒業の翌年1914年に帰国し、建築学第三講座が建築構造第二講座に変わりこれを担当し、同時に第四講座が発足し建築史講座として伊東忠太が教授として担当した。

藤井は、このように、東京帝大においては当代の各分野の指導的立場にある教師陣から、建築家としての充実した基礎教育を受け、また、卒業後も同窓生との関係などからも、彼自身が建築家、教育者としての人的な財産を築いた時期であったと考えられる。

4. 竹中工務店時代

藤井厚二は、1913年東京帝国大学工学部建築学科を卒業と同時に合名会社竹中工務店に入店し、1919年5月に退社するまで約6年間在職した。藤井は竹中工務店にとって初めての学士建築家であった。藤井の竹中工務店への入社経緯については、14代竹中藤右衛門の意向と、藤右衛門の同郷で相談役のような形であった松井清足(M36東京帝大卒)の推薦によって実現したが、藤井の同郷の先輩である武田五一や京都帝大土木工学科教授日比忠彦との関係も影響があったものと考えられる。また、松井は福山出身で清水組の技師長を勤めた田辺淳吉と東京帝大建築学科で同級生である。

竹中工務店は、1909年に本店を名古屋から神戸に移転し、設計施工をめざす「合名会社竹中工務店」とし、藤井が入店後の1916年には定款の事業目的を「建築工事ノ請負」から「建築工事ノ請負並ビニ設計監督」と改め、設計施工の方針をより明確に打出している。

竹中在職中の藤井の設計した作品は、大阪朝日新聞社(1916年竣工)、橋本ビルディング(1916年竣工)、村山龍平邸和館(1917年竣工)、大阪朝日新聞社(1917年竣工)、十合呉服店(1918年竣工)、明海ビルディング(1921年竣工)である。最後の作品である明海ビルディングは藤井の退社後の1921年に竣工した。

大阪朝日新聞社屋は、藤井にとって初めての実作であり、竹中にとっても洋風大建築の設計施工の始まりであった。この時の朝日新聞社では村山龍平が社主で

あり、建築にあたっては、日比忠彦（京都帝大土木工学科教授）、武田五一（京都高等工芸学校教授、京都府技師、大蔵省臨時建築部技師兼務）が朝日新聞社側の顧問であった。

1917年には藤井の推挙で後継者となる鷺尾九郎（T6 東京帝大建築卒）が入店し、設計部の充実が計られはじめた。この時の設計部員は藤井以下9名であった。1918年には日比忠彦の推挙により、藤井弥太郎（京都帝大土木工学科卒）が入店し、明海ビルディングの構造設計担当し、竹中の構造設計の基礎を築いた。

藤井の退店後、1920年には松下甚三郎（逓信省経理局営繕課から）、石本喜久治（T9 東京帝大建築卒）が入社、1922年には石川純一郎（T11 東京帝大建築卒）が入社、1926年には石本喜久治が岡村滝造（後の山口文象）を入社させた。1927年には石本喜久治、岡村滝造が退社し、松下甚三郎、藤井弥太郎が死去した。

1929年の竹中設計部陣容は大阪本店では鷺尾部長以下約25名、東京支店約15名、名古屋、神戸支店、京都、横浜出張所をあわせると合計約50名となり、設計部の陣容が非常に充実している。

竹中工務店では藤井入社以前から多くの建築家との関係があった。神戸進出のきっかけとなった三井銀行神戸小野浜倉庫は、横河民輔（東大 M23 卒）が三井側の設計監督として統括し、直接の指導監督は鈴木禎次（M29 東大建築卒）が行なった。1908年には横河工務所設計監督で鐘淵紡績京都工場、1909年に鐘淵紡績洲本工場を、1910年には辰野・片岡建築事務所の設計で日本生命保険名古屋支店、1912年には日比忠彦教授の推薦で難波新平が高島屋京都店設計を行なっている。

なお、鈴木禎次の妻時子と夏目漱石の妻鏡子は姉妹であり、父中根重一は1851年に福山藩士の子として生まれ、貴族院書記官長などを歴任した。

藤井は竹中工務店在職中の1917年に神戸に木造2階建ての最初の自邸を建て母親と同居している。

1918年には出雲大社大宮司出雲國造の娘である千家壽子と結婚した。竹中退社後私費で1919年11月から1920年8月にかけて欧米旅行に出かけ、1920年4月に欧米の視察旅行に出かけた竹中藤右衛門とアメリカで会っている。

5. 京都帝国大学時代

5.1 京都帝国大学建築学教室

京都帝国大学工学部建築学科は1920年9月に設立され、藤井は設立直後の同年12月2日に講師に就任してから、教授として亡くなる1938年7月17日まで、同学科に在職していた。

藤井の着任時にはすでに、建築学科創設委員であった日比忠彦（在職 T9. 8. 13-T10. 06）（M30 東京帝大土木卒）、武田五一（在職 T9. 9. 10-S11. 9. 14）（M30 東京

帝大建築卒）両教授と、京都府技師から転任した天沼俊一助教授（在職 T9. 8. 30-S11. 9. 14）（M35 東京帝大建築卒）と太田喜二郎（在職 T9. 9-S21. 3. 31）（東京美術学校中退）が講師として授業が開始されていた。日比忠彦は、東京帝大の佐野利器とならぶコンクリート構造についての先駆者であるが、1920年5月から1921年1月まで欧米へ出張していたため、藤井の着任時には不在であった。また帰国後まもなく1921年6月2日に逝去したため、大学在任中の交流は非常に短い。しかし、前述のように、藤井が竹中工務店に在職中に設計を行なった「大阪朝日新聞社本社屋」は、日比、武田ともに朝日新聞社側の設計顧問であったことから、すでにこの時点から藤井と日比の接点があった。

また、日比の門下生である荒木源次助教授（在職 T10. 5. 30-T12. 8. 12）（T8 東京帝大土木卒）は、日比が亡くなる直前の1921年5月に着任するが、1922年にドイツ留学、1923年8月12日留学先で客死している。したがって、藤井との接点はあまりない。

天沼俊一（在職 T9. 8. 30-S11. 9. 14）は1920年8月助教授として着任するが、1921年3月から同12年3月の間に欧米留学するなど、就任当初の藤井との交流期間は短い、その後は1936年の天沼の退職まで長く学科内での交流があったものと思われる。

その他、大正年間に就任または着任していたのは、大井清一教授（在職 T10. 4-T13. 4）（東京帝大土木卒）（兼任）、坂静雄助教授（在職 T11. 4. 25-S34. 11. 16）

（T10 東京帝大建築卒）、森田慶一助教授（在職 T11. 12. 22-S33. 4. 18）（T9 東京帝大建築卒）、すこし遅れて1925年に名古屋高等工業学校教授であった三浦耀（在職 T14. 2. 17-S6. 10. 8）（T4 東京帝大建築卒）が助教授として着任した。

同様に講師陣についても、多くが1922年までの間に委嘱されている。京都工芸学校教授本野精吾（在職 T10. 7-不明）（M39 東京帝大建築卒）、京都府技師阪谷良之進（在職 T10. 7-S4）（M40 東京美術学校卒）、笹川新太郎、関場茂樹（在職 T10. 9-T13. 9）（M36 東京帝大土木卒）、建築家片岡安（在職 T11. 2-S4）（M30 東京帝大建築卒）、神戸高等工業学校教授古宇田実（在職 T11. 11-S12. 3. 31）（M35 東京帝大建築卒）、中牟田三治郎（在職 T11. 11-S5. 6. 3）（東京美術学校卒）、さらにこの間、東京帝大教授の関野貞（M28 東京帝大建築卒）が1920、21、22年度に特別講義を行なっている。

昭和に入ってから、1927年に伊東恒治助教授（在職 S2. 12. 23-S21. 3. 8）（T14 京都帝大建築卒）、1928年に棚橋諒講師（在職 S6. 6. 25-S45. 3. 31）（S4 京都帝大建築卒）、1934年に横山尊雄助教授（在職 S9. 5. 11-S23. 10. 27）（S5 京都帝大建築卒）、1937年に村田治郎講師（在職 S12. 4. 21-S33. 9. 23）（T12 京都帝大建築卒）

がそれぞれ就任している。

講師陣は、池田実（在職 S5. 3. 31～S12. 3. 31）（M37 東京帝大建築卒）、松田尚之（在職 S5. 6. 3～S12. 2. 26）（東京美術学校卒）、藤原義一（在職 S5. 4. 2～S12. 3. 31）（S3 京都帝大建築卒）、鷺尾健三（在職 S6. 12. 1～S8. 3. 31）（S5 京都帝大建築卒）、永沢毅一（在職 S6. 12. 1～S8. 3. 31）（T4 東京帝大建築卒）、枝村靖（在職 S7～S8. 3. 31）（T14 京都帝大建築卒）、滝沢真弓（在職 S8～S17. 2. 17）（T9 東京帝大建築卒）、中沢誠一郎（在職 S12. 3. 31～S13）（T9 東京帝大建築卒）、安井武雄（在職 S12. 3. 31～S21. 5. 31）（M43 東京帝大建築卒）、奥島正一（S 在職 12. 3. 31～S18. 7. 31）（S11 京都帝大建築卒）の 10 名がいた。さらに助手が 10 名であった。

また、藤井の逝去後の京都帝大第四講座（建築設備講座）は伊東恒治、横山尊雄両助教授が担当を引き継いでいる。両助教授とも藤井の門下生であり、藤井の遺志が継承されているものと思われる。

建築学教室では、武田五一が筆頭であったが、森田慶一を教員として招くなど、実質的には藤井が教室の運営の中心として活躍したが、建築学教室の教員との私的な親交はさほどなかったようである。

5.2 建築学研究執筆者

京都帝国大学の建築学教室では、森田慶一、服部勝吉、東畑謙三を中心に建築学研究会が発足し、昭和 2 年 5 月から同人誌「建築学研究」の発行をはじめた。藤井厚二はこの時すでに教授に昇任しており、「建築学研究」の「生みの親、育ての親」といわれている。この「建築学研究」について、昭和 2 年 5 月の創刊号から、最後に横山尊雄との共著である投稿が掲載された昭和 13 年 10 月発行の第 90 巻までの執筆者について整理する。

創刊時の教員は、天沼俊一、武田五一、藤井厚二、坂静雄、森田慶一、三浦耀であった。創刊直後に伊東恒治が着任し、その後は棚橋諒、横山尊雄、村田治郎が教員として加わった。

創刊時の同人は、教官が森田慶一、大学院生が元良勲、真名種夫、伊東恒治、布施忠司、東畑謙三の 5 名、卒業生として服部勝吉、福山敏男の 2 名がいた。編集は森田慶一、東畑謙三、伊東恒治が担当した。創刊号から第 90 巻までには、巻頭言、翻訳、資料紹介などを含め、375 編が掲載されている。その内著者が不明の 1 編を除くと、著者、翻訳者、資料紹介者など 63 名が執筆している。

そのなかで最多は翻訳、共著を含め、伊東恒治の 37 編、次が吉田信武の 35 編、森田慶一 31 編、棚橋諒 25 編、服部勝吉 24 編、天沼俊一が 22 編と本名で 1 編、東畑謙三 19 編、横山尊雄、藤井厚二が共に 16 編、八木清之助 13 編、などである。

内容は、設備系 70 編、構造 66 編、歴史系 58 編、建築論 47 編、計画系 34 編旅行記 31 編、住宅系 25 編、都市計画系 25 編、などであった。この内の藤井の担当講座であった設備系 70 編の内、藤井厚二が共著も含め 13 編、藤井門下の伊東恒治助教授が 32 編で、創刊当時大学院生であった八木清之助の 13 編を加えると、実に 8 割以上に当る 58 編をしめている。

藤井の投稿は、昭和 2 年 8 月第 4 巻の「気候の季節的变化に因る影響に就いて」、昭和 3 年 7 月、8 月第 13、14 巻の「住宅の日本趣味(一)」、「住宅の日本趣味(二)」、昭和 8 年 8 月第 67 巻の「建築と設備」であり、単著としては最後の昭和 8 年 10 月第 70 巻の「床の間に就て」の 5 編である。その後、横山尊雄と共著である「日本人に対する建築諸設備の寸法的研究(一)～(十一)」11 編が掲載された。藤井は昭和 13 年 7 月 17 日に逝去しており、同 13 年 9 月に発行された第 89 巻と、同年 10 月の第 90 巻は藤井の逝去後の発行であった。

また、昭和 8 年の第 68 号発刊後、経営困難から存続があやぶまれたが、藤井の斡旋で、片岡安が会長をしていた日本建築協会に委託して発刊を継続させた。

このように、「建築学研究」を牽引した藤井の貢献は非常に大きい。藤井は、京都帝大建築学教室を拠点として、同教室を中心とした多彩な人脈を核として、京都帝大建築学教室のみならず、建築環境学の発展に大きく寄与したことが明らかである。

5.3 「瓶史」と西川一草亭について

西川一草亭は、1878 年 1 月 12 日京都において花道「去風流」の家元に生まれ、10 代なかばで、第 7 代家元を継承した。2 歳下には弟亀吉（津田青楓）がいる。

一草亭は、花道だけでなく、絵画、習字を学び、美術、工芸にも造詣が深く、庭園や茶室を創ったり、「茶心花語」、「風流生活」、「風流百話」など著書も多い

一草亭には京都、阪神、東京に多くの社中がいた。藤井厚二（大正 16 年入門）も、婦人壽子（大正 13 年入門）と共に西川一草亭に師事しており、他にも浅井忠、高安月郊、都鳥英喜、幸田露伴、加賀昌子、吉川元光などの文化人、著名人が多数いた。また、交友関係も広く、西園寺公望、富岡鉄斎、九条武子、武田五一、夏目漱石らとの交流もあった。

昭和 5 年からは伝統文化研究誌として「瓶史」を発刊した。また、「瓶史」には、藤井厚二の「床の間の話」と題した一文が掲載されている。「瓶史」の執筆者、座談会などへの参加者をみると、当代を代表する文化人、芸術家、文人などの名前が連なっている。

「瓶史」には、昭和 7 年新春号に掲載された「掃花寮茶話」を最初に、昭和 13 年新年特別号に掲載された『「宗湛日記」を読む会』までの 24 編の座談会の記事が掲載されている。大半の座談会は、西川一草亭と堀

口捨己を中心に行なわれている。藤井は、助教授時代に同級生の堀越三郎の東京帝大の研究室を訪れおり、その当時堀口捨己が大学院生であった。藤井は1927年に住宅論の集大成である『日本の建築』を岩波出版から出版しているが、社主の岩波茂雄は堀口が紹介している。また、新建築社の吉岡保五郎とも親交があり、藤井の死後遺作となった扇葉荘の写真集は新建築社から出版されている。

座談会の参加者は50名で、延べ148名が出席している。座談会出席者のうち、東京帝国大学卒業者は、茅野蕭々、和辻哲郎、新村出、堀口捨己、正木直彦、板垣鷹穂（中退）、濱田青陵、志賀直哉（中退）、西田幾多郎の9名、京都帝大出身は、肥後和男、藤直幹、井川定慶、西堀一三、谷川徹三、秋山光夫、栗野秀穂、山根徳太郎、柴田実、吉川元光の10名である。

この内、新村出、濱田青陵、藤直幹、柴田実、和辻哲郎、西田直二郎の京都帝国大学の教員のグループであり、加えて西田幾多郎も京都帝国大学の旧教員である。さらに京都帝大の史学関連では、西田主宰の「金曜会」や京都帝大民俗談話会（後の京都帝大民俗学会）のメンバーなどである肥後和男、井川定慶、西堀一三、栗野秀穂、山根徳太郎、肥後和男、秋山光夫がいる。谷川徹三、板垣鷹穂、金原省吾、堀口捨己は帝国美術学校（現武蔵野美術大学）の教員である。加えて、東京での美術関係、大学教員として、正木直彦は1901年から1932年まで東京美術学校長を勤め、秋山光夫は1926年より帝室博物館鑑査官、肥後和男は1932年東京文理科大学文科（東京教育大）教授を勤めている。また、安部能成、小宮豊隆、野上豊一郎、和辻哲郎らの夏目漱石門下並びに関係者の一団もいる。吉川元光（1894～1953）は、旧岩国藩主、子爵であり、1920年に京都帝国大学経済学部を卒業しており、1930年に堀口捨己が住宅を設計し、翌年には一草亭が茶室を造っている。妻芳子（1897年生）の母真佐子は、第80代出雲大社大司出雲國造千家尊福の妹であり、藤井厚二とは非常に近い縁戚にあたる。

一草亭は、生花の本質は花の個性を生かし、作者の考えによる新しい挿花芸術の創造であるとし、流儀花からの脱却をはかり、時代に即応した自由な新しい芸術活動を行っていた。また、茶の湯についても、茶の湯は本来日常生活に根ざしたもので、薪水の労を親らすることにあり、茶器なども、自分自身の目で見ても美を感じたものであればよいとし、所謂名物などには全くとらわれない自由な発想の取り組みを行っていた。茶室においても、にじり口をなくしたり、床の間にも旧来のように特別な意味合いを持たせず、のびのびした広い空間を創っている。これは、藤井厚二の最後の実験住宅である「聴竹居」の下閑室に通じる。

また、一草亭は、庭は障子を額縁としてみるのが良いと言うが、「聴竹居」の縁側から望む風景がまさしくそれにあたる。

藤井厚二の実験住宅の近くには、妙喜庵、加賀家の大山崎山荘があり、西川一草亭が1932年（昭和7年）には吉川子爵とともに山崎妙喜庵を訪れ、1933年には加賀家大山崎山荘、水無瀬神宮、聴竹居で春期大会を行っている。

このように、一草亭は、京都において多彩な活躍をした文化人であり、ある種の知識共有体、文化サロンを形成していた。一草亭は、死の直前まで精力的に活動を続け、「風流一生涯」の言葉をのこし1938年（昭和13年）に死去した。

5.4 施主と工事関係者

藤井厚二は、竹中工務店時代の作品をのぞき、58作品を設計している。現時点で施主の職業が明らかなのは以下のとおりである。

戸田邸（1924年）は、京都市左京区北白川蔦町22に建築された。施主の戸田正三は京都帝大医学部衛生学教室に在籍し、研究上も交流があった。

太田邸（1924年）は、京都市上京区鳥丸通上立売に建築された。施主の太田喜二郎は京都帝大建築学教室で絵画実習講師であり、藤井の肖像画も描いている。

八木市蔵邸（1930年）は大阪府北河内郡香里（旧地名）現在の寝屋川市香里園に建築された。施主の八木重兵衛（市蔵）は茶道関係の交流があった。施工は酒徳金之助が行なった。

本庄邸（1931年）は京都市左京区銀閣寺前26に建築された。施主の本庄は京都帝大法学部教授であった。

汐見邸（1933年）は京都市左京区吉田神楽岡町に建築された。施主の汐見三郎は京都帝大経済学部教授で友人であった。

小川邸（1934年）は京都市左京区北白川小倉町50-10に建築された。1922年に左京区鹿ヶ谷に建築されたRC2Fの本宅は武田五一の設計であった。

工務店、施工関係者としては、藤井の作品の多くを手掛けた酒徳金之助、藤井を師と仰いだ熊倉工務店の熊倉吉太良、あめりか屋などがいる。

熊倉工務店は、熊倉家第9代熊倉順三郎が1897年に土木建築請負業として創業した。

熊倉家第10代熊倉吉太良は、1894年に岸田良造と多賀の三男として京都で生まれた。1919年順三郎の娘の千代と結婚して熊倉家の婿養子になった。岸田良造は社寺造営が専門の京都の宮大工であったが、1910年（M43）に京都で最初のRC建物の京都市商品陳列館の工事を行なった。設計は京都高等工芸学校図案科教授武田五一、RC構造施工指導は京都帝大土木学科教授日比忠彦があたり、吉太良にとってはじめてのコンクリ

ート建築への関わりであり、京都帝大の人々との接点であった。

京都帝大文学部陳列館(1914年)(設計山本治兵衛(京都帝大建築部)、永瀬狂三(京都帝大建築部))で、熊倉はトラスの入隅出隅部分の施工を行なった。

京都帝大建築学科本館(1922年)(設計武田五一)では、岸田良造(吉太良の父)が請負い、吉太良は鉄筋組立工事を行ない、吉太良の兄良吉が仮枠工事を行なった。吉太良はこの時始めて藤井厚二と出会った。

1930年の関医院は、設計が永瀬狂三であった。永瀬狂三は1906年東京帝大建築卒業で、本野精吾、岡田信一郎と同級であり、1909年京都帝大建築部に勤務し、1929年京都帝大営繕課長を退職、1945年まで京都工学校校長であった。

1934年の山内得立(京都帝大教授、文学博士)邸は、設計小林正紹(大蔵省営繕管財局技士)、現場監理澤島英太郎(S6京都帝大卒)であり、澤島は1932年に三高同窓の上西亮二から自宅建築の相談を受け、武田五一の紹介で熊倉に会った。1933年には澤島は京都建築協会の理事として「家の建つまで」を刊行している。

熊倉組の昭和初期のスタッフは、現場監督の井内健治(吉太良の工兵隊時代の同僚)、設計は大村栄太郎(京都工学校卒)、上野(旧姓世継)富三(京都工学校卒)、有馬芳雄、田中(旧姓山東)二郎、河合岩雄などであった。

あめりか屋は、1909年(M42)に橋口信助が設立した。1916年(T5)には、橋口信助、三角錫子(女子教育家)があめりか屋内に住宅改良会設立し、昭和18年まで月刊誌「住宅」を発行した。あめりか屋は1917年(T6)に大阪出張所を設置し、同年には武田五一が住宅改良会顧問に就任した。

6. まとめ

藤井厚二はプロフェッサーアーキテクトとして活躍し、教育者、建築家であり、建築に科学的な思考をとりいれた建築環境工学の先達であり、建築学教室の運営を行なうマネージャーであった。

幼少期から、文化的な環境に育ち、京都帝大に移ってからは藤井家の資力を背景に大山崎に広大な土地を購入し、実験住宅の建築をくりかえし、環境工学の基礎を造り上げた。

武田五一、森戸辰男、林譲治、田辺淳吉ら福山出身者に共通してみられる進取の気象、自己を高めかつ組織を取りまとめる能力を遺憾なく発揮した。

西川一草亭との交流にみられる、日本の心、そこに見られる壽子婦人の活躍も見逃せない。幅広い交流の中から、施主となる人々も多くいた。藤井の非常に洗練された作品を造り上げることができた、

酒徳をはじめ、非常にすばらしい腕をもった大工をはじめ家具職人その他多くの職人達の存在も大きい。

竹中工務店では、大学卒業後すぐに朝日新聞社をはじめすばらしい建築の設計の機会があったのは、本人の能力の高さにもよるが、全てをまかせた竹中藤右衛門の信頼も大きい。退社後にアメリカで再会をするのもその絆のあらわれであろう。

京都帝国大学では、研究、設計活動のほか、学術誌「建築学研究」の発行の支援を行うなど、学術的分野においても精力的に活動を行ない幅広い人脈を持っていた。

藤井自身、非常に素質にも恵まれ、努力もおこなっているが、このような環境、人間関係の中でそれが見事に開花した。素封家の家に生まれ、このような芸術、文化的な雰囲気の中で育ち、多くの文化人との幅広い交流は、建築家藤井厚二の思想、作品を形成するうえで非常に大きな影響があったことは十分に推測できる。

参考文献

- 建築研究会他「建築研究」第1巻第30巻 建築研究会他 昭和2年-昭和13年
京大建築学寮六十年史編纂委員会編 京大建築学寮創立六十周年記念事業会
京都大学工学部建築学寮六十年史 1980年
小能桧城書庫発行会「遺稿 小能桧城 小能桧城書庫発行会 1981年
東京大学百年史編纂委員会「東京大学百年史 東京大学 1986年
村松貞次郎 別冊 新建築 日本現代建築家シリーズ14 竹中工務店留稿
新建築社 1986年
村松貞次郎「日本建築家山脈 鹿島研究所出版会 2005年
石川裕一「近代建築の夜明け 京都・熊倉工務店洋風住宅建築の歴史 淡交社 2006年
小泉千代他「建築家藤井厚二の住宅作品にみられるインテリアの特徴及び環境共生手法
に関する調査研究、京都女子大学家政学部生活デザイン科 2006年
拙稿「藤井厚二研究 -藤井厚二の系譜について-」日本建築学会中国支部研究報告集
第26巻 2003年
拙稿「藤井厚二研究 そのII-藤井家を巡る人々について-」日本建築学会大会学術
講演要録集 2003年
拙稿「藤井厚二研究 -藤井家および藤井厚二を巡る人々-」福山大学工学部要
第27巻 2003年
拙稿「阪史」にみられる武田五一、藤井厚二、堀口信二と西川一草亭 その1、その2
日本建築学会中国支部研究報告集第27巻 2004年
拙稿「阪史」に記載された懇話会出席者についての考察 日本建築学会中国支部研
究報告集第27巻 2004
拙稿「藤井厚二研究 「日本の住宅」についての考察 日本建築学会中国支部研
究報告集第28巻 2005年
拙稿「藤井厚二研究 藤井厚二の「日本の住宅」と武田五一の住宅建築要
論
についての考察 日本建築学会大会学術講演要録集F-2 2005年
拙稿「阪史」に記載された懇話会についての考察 日本建築学会大会学術講演
要録集 2005年
拙稿「藤井厚二研究 -藤井厚二と京都帝国大学建築学寮-」日本建築学会
大会学術講演要録集 2007年